

ヨシュア記22：1-34「危険な誤解」導入

ヨシュア記の最後の3章には、3つの助言が記されています。ひとつめは、ヨシュアが二部族および半部族に対して語ったもので、22：1-9に登場します。

ふたつめは23章に、そして3つめは24章に記されています。

この個所で、ヨシュアは神の民に語りかけます。約束どおりに相続地を与えてくださり、すべての必要を満たしてくださった神にふさわしい応答をするようにと励まします。

ヨシュアが語ったひとつめの助言は、ヨルダン川の向こう岸に定住することになった部族の勇士たちに語られた言葉です。彼らは妻や他の家族から7年も離れて暮らし、イスラエルの民の土地獲得に加担する責任を果たしました。

ヨシュア4：12-13によると、その人数は4万人でした。

ヨシュアは、彼らと呼び集め、帰途に就く彼らに賛辞を述べ、いくつかアドバイスを伝えました。

そのおもな内容は3つあります。

1. 彼らの従順を褒めた。(1-3節)

彼らはモーセに命じられたことだけでなく、実際に指揮をとったヨシュアの指示にもよく従いました。

彼らは7年間、自分たちの快適な暮らしより、民全体の益を優先させました。

彼らは言葉を違えない誠実な人たちでした。

同胞であるイスラエルの民に対して忠実を尽くしました。

ここで注目すべきことがひとつあります。これは、私たちにも当てはめることができる教えです。

では、ヨシュア1：12-15を読みましょう。

1:12 ヨシュアは、ルベン人、ガド人、およびマナセの半部族に、こう言った。 1:13 「【主】のしもべモーセがあなたがたに命じて、『あなたがたの神、【主】は、あなたがたに安住の地を与え、あなたがたにこの地を与える』と言ったことばを思い出しなさい。 1:14 あなたがたの妻子と家畜とは、モーセがあなたがたに与えたヨルダン川のこちら側の地に、とどまらなければならない。しかし、あなたがたのうちの勇士は、みな編隊を組んで、あなたがたの同族よりも先に渡って、彼らを助けなければならない。 1:15 【主】が、あなたがたと同様、あなたがたの同族にも安住の地を与え、彼らもまた、あなたがたの神、【主】が与えようとしておられる地を所有するようになったなら、あなたがたは、【主】のしもべモーセがあなたがたに与えたヨルダン川のこちら側、日の上の方にある、あなたがたの所有地に帰って、それを所有することができる。」

指導者が変わっても、当然この部族はモーセの命じたことに従うだろうとは、ヨシュアは思いませんでした。むしろ、モーセとの約束について彼らに念押ししました。

彼らは、時のリーダーにただ従っていたのではなく、神に従ったのです。

適用

私たちが従うべきは、イエス・キリストと神のみことばである聖書です。牧師が教会を去ると、教会に来なくなる信徒がいます。それは、イエス・キリストと神のみことばではなく、そのリーダーである人間についていっているからです。その人たちがそうと認めなくても、それが現実です。

そういう人たちは、イエス・キリストではなく牧師を信頼しているので、信仰から離れてしまうこともあります。

指導者が変わっても、イエスと神のみことばに忠実でありつづけるには、成熟した信仰が要ります。

## 2. ヨシュアは、正しく生きるようにと助言した。(5-6節)

5-6節は、申命記6：5、10：12、11：13,22、30：6,16,20のみことばをまとめたものです。この言葉は、マタイ22：36-38にも記されています。

22:36 「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」 22:37 そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』 22:38 これがたいせつな第一の戒めです。

これまでの学びの個所で、ユダヤ人の軍勢はカナンで勝利を収めました。それは、ヨシュアが神を愛し、神のみことばに従ったからです(ヨシュア1：7-8)。これこそ、勝利の秘訣でした。しかし、この部族は、ヨシュアの直接的な管理から離れることになるので、自分たちで責任をもって自らの信仰生活や神との歩みを続けていかなければなりません。

ヨシュアは、いくつか霊的な課題を与えました。

まず、神を愛することです。これが何より大切な課題でした。神に従う動機は、神への愛でなければなりません。

イエスはヨハネ14：15で「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」とおっしゃいました。従順である要因は、愛でなければならないのです。

彼らが神を愛するなら、神の道を歩み、神の掟を守りたいと思うでしょう。

次に、神にすぎることです。

ここで「すぎると訳されたヘブル語の単語は、「しがみつく」という意味で、英語の単語は「cling」(クリング)です。

英国で「cling film」(クリングフィルム)という、サランラップのことです。食べ物が空気に触れないように包むラップです。英国では、サンドイッチを包むのに毎日のように使います。ラップが食べ物に密着して、食べ物を新鮮に保ちます。

ヨシュアは勇士たちに、神との関係に邪魔が入らないためには、神にぴったりと密着するようにつながっていなければならないと語ったわけです。

3つめは、神に仕えることです。彼らは勇士として7年間神に仕えてきました。そしてこれからは家族のもとに戻って一般市民の暮らしをします。そんな普通の暮らしの中でも彼らが神に仕える時間を作るようにとヨシュアは勧めています。

## 3. 勇士の働きにヨシュアが報いる。(7-8節)

7-8節は、ヨシュアが勇士たちに「多くの財宝」を持って帰らせたと語ります。銀、金、青銅、家畜、そして多くの衣服を彼らは持ちかえりました。これらは戦利品の一部でした。しっかり仕えたことに対する報酬だったわけです。

ヨシュアは、その戦利品の数々を同胞と分け合いなさいと語りました。この同胞とは、家族や所有物を守るために残った人々のことです。

家族の世話をするために残った人たちにも戦利品を分けるようにという原則を打ち立てたのはモーセです。（民数記31：26-27）

### ひとつめの助言を実生活に適用する

#### 1. 神に仕える人たちの奉仕を労わなければならない。

私の知る教会では、牧師が創立記念礼拝で各奉仕チームの働きに感謝の意をこめて表彰し、祈ります。OIC に赴任する前に英国で牧会した教会でも、毎年の創立記念礼拝で似たようなことをしていました。OIC でも今年の創立記念礼拝からこのようなことを始めてはいかがでしょうか。

#### 2. 私たちは、愛による神との関係を常に育まなければならない。

クリスチャンになったばかりのころは、神とつながっているだけで心が躍るようだったかもしれません。けれども、年月が経ち、人生のあらゆる出来事を通ると、神への愛が薄れてくることがあります。愛がなくなったわけではありませんが、昔のような輝きは失われます。まるで、蛍光灯によく付いている常夜灯のようなものです。神を知っている安心感がありますが、神に仕える喜びやときめきはそれほど感じません。

そんなとき、どうすればよいのでしょうか。

結婚生活でも、ふたりの関係を改善しようとデートに出かけたり、花束を贈ったり、ふたりでゆっくりとよい時間を過ごしたりします。

神との関係も同じです。神とゆっくりよい交わりを持つ時間を取りましょう。午前、午後、夜でもいいですが、半日を丸々、聖書を読んで祈って過ごそうと考えたことはありますか。なかなかひとりではできそうにないなら、いっしょにそうしてくれる友人を見つけましょう。神に花束を贈ることはできませんが、献金額を増やすのもよいですし、宣教師やクリスチャンの働き人に必要な献金を送ることもできるでしょう。

しかし、私たちが神に贈ることのできる最高のプレゼントは私たち自身です。

#### ローマ12：1-2

**12:1** そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。 **12:2** この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何がよいことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

神にささげられるようなものは何もないと思っているかもしれませんが、私たちが自らをささげるなら、神はそれを受け入れてくださいます。そして、栄光のために用いてくださいます。

では、22章の後半へと進みましょう。この部分が、今日のメッセージのタイトルとなった「危険な誤解」の個所です。

ヨシュア22：10-34をリビングバイブルで読みましょう。

10ところが、ヨルダン川を渡る寸前、まだカナン<sup>10</sup>の地にいた時のこと、彼らは、だれの目にもとまるほど大きな、祭壇をかたどった記念碑を建てたのです。11このことを伝え聞いた他のイスラエル人は、12シロに全軍を集結し、一戦を交える構えを見せました。13しかし、何はともあれ、まず祭司エルアザルの子ピネハスを団長とする代表団を、送ることにしたのです。一行はヨルダン川を渡り、ルベン、ガド、マナセの各部族と話し合うことにしました。14この代表団には、十部族の部族長の家系から一名ずつ、十人が加わっていました。15ギルアデに着いた一行は、こう問いました。16「神様の国民であるわれわれは、なぜ、君たちがイスラエルの神様に罪を犯すようなまねをしたのか、ぜひとも知りたい。なぜ、神様から離れ、反逆のしるしである祭壇なんかを築いたのだ。1718われわれがペオルで犯した罪を覚えているかね。そのために、あれほど大きな災いが下ったというのに、まだあの罪はぬぐい去られていなかったというわけか。あんなことなど問題ではないと言うつもりか。それで、また反抗するのか。わかっているだろうな。君たちがきょう、神様に反逆すれば、あす、われわれ全員に神様の怒りは燃え上がるのだぞ。19この地が汚れているので祭壇が必要だというのなら、ヨルダン川西岸の、神の天幕のある地に来るがよい。われわれの土地を君たちと共有にしてもかまわないのだ。神様の祭壇はただ一つだ。ほかに祭壇を築いて、神様に反逆するようなまねはやめてくれ。20よもや忘れてはいまいな。ゼラフの子アカンのことだ。彼ひとりが罪を犯したために、全国民がきびしく罰せられたではないか。」21こう言われて、ルベンとガドとマナセの半部族の人々は、次のように弁明しました。2223「神の神、主に誓って申し上げます。私どもは、反逆するつもりで祭壇を築いたのではございません。神様はご存じです。皆さんにもわかってほしいのです。完全に焼き尽くすいけにえや、穀物の供え物や、和解のいけにえをささげるために、祭壇を築いたではありません。もしそうなら、幾重にも神様にのろわれますように。2425実は、神様を愛すればこそ、このようにしたのです。それに、将来、私どもの子供が皆さんの子供から、こう言われはしないかと心配だったのです。『どんな権利があって、おまえらはイスラエルの神様を礼拝するんだ。おまえらとぼくらは別々なんだ。神様がちゃんと、ヨルダン川という境界を置いていらっしやるじゃないか。おまえらなんか神様の国民じゃない。』実際、息子の代になってみれば、神様を礼拝するのをはばまれるかもしれませんからな。2627ですから、私どもも完全に焼き尽くすいけにえや和解のいけにえ、その他のいけにえをささげて神様を礼拝できることを、私どもと皆さんとの子供に示す記念碑として、あの祭壇を築いたわけです。そうすれば、私どもの子供が、『おまえらなんか神様の国民じゃない』と仲間はずれにされることもないでしょう。28たといそう言われても、胸を張って答えることができます。『ぼくらの先祖が、神様の祭壇の型にならって作った、この祭壇を見てくれ。これは完全に焼き尽くすいけにえや、その他のいけにえをささげるつもりのものじゃない。ただ、ぼくらと君たちが、共に神様と結び合わされた者同士であることのしるしなのだ。』29完全に焼き尽くすいけにえや穀物の供え物、その他のいけにえをささげる祭壇を築いて、神様から離れたり、反逆したりするなんて、とんでもない。ありえないことですよ。いけにえをささげる祭壇は、神の天幕の前にある祭壇だけなのですから。」30祭司ピネハスと随員は、ルベン、ガド、マナセの各部族から事情を聞いて、すっかり安心しました。31ピネハスはこう宣言しました。「本日、われわれの真ん中には神様がおられることが明らかになった。なぜなら、諸君は、こちらが懸念したような、神様への罪を犯してはおらんからな。いやむしろ、われわれを滅びから救ってくれたのだ。」32ピネハスと十人の代表は、帰って一部始終を報告しました。33イスラエル人はみな大喜びし、神様をほめたたえ、二度と、ルベンやガドの部族と戦おうとは言わなくなりました。34一方、ルベンとガドの人々は例の祭壇を、「私たちにとっても彼らにとっても、主が神様であることの証拠だ」と言って、「あかしの祭壇」と名づけました。

勇士たちは新しい生活の待つ場所へ旅立とうとしていました。彼らはヨルダン川流域までやってきましたが、まだカナン<sup>10</sup>の地にいました。

10節には、彼らが大きな祭壇を築いたとあります。それは将来、証となるためでした。ヨルダン川の対岸に住む彼らを、イスラエルの民が同胞と見なしてくれなくなる日が来るのではないかと恐れたからです。

いけにえをささげるための祭壇ではなく、ヨルダン川西岸にいる部族と同じイスラエルの民であることを証するための祭壇でした。

しかし、これは間違いでした。というのも、その祭壇を築くように神から命じられてはいなかったからです。

意図はよかったのですが、これが大きな誤解を招きました。

どういうわけか、他の部族の人々には、彼らが異教の神のための祭壇を築いたと伝わってしまいました。それで、神のみことばに逆らった部族を倒そうと、大軍が集結しました。

レビ記17：8-9

17:8 また、あなたは彼らに言わなければならない。イスラエルの家の者、または彼らの間の在留異国人のだれであっても、全焼か、または、ほかのいけにえをささげ、 17:9 それを【主】にささげるために会見の天幕の入口に持って行かないなら、その者は、その民から断ち切られる。

さいわい、イスラエルの民はすぐさま戦いに出たりせず、まず調査団を派遣しました。

祭司エリアザルの子ピネハスは、10人の代表団を率いて真実を突き止めるよう遣わされました。真実の究明にピネハスは適任者でした。彼は他の部族からも高く評価される人物でした。彼が評価されるようになったのは、民数記25：1-9に記されたある出来事がきっかけです。

民数記25：1-9

25:1 イスラエルはシティムにとどまっていたが、民はモアブの娘たちと、みだらなことをし始めた。 25:2 娘たちは、自分たちの神々にいけにえをささげるのに、民を招いたので、民は食し、娘たちの神々を拝んだ。 25:3 こうしてイスラエルは、バアル・ペオルを慕うようになったので、【主】の怒りはイスラエルに対して燃え上がった。 25:4 【主】はモーセに言われた。「この民のかしらたちをみな捕らえて、白日のもとに彼らを【主】の前でさらし者にせよ。【主】の燃える怒りはイスラエルから離れ去ろう。」 25:5 そこでモーセはイスラエルのさばきつかさたちに言った。「あなたがたは、おのおの自分の配下のバアル・ペオルを慕った者たちを殺せ。」 25:6 モーセとイスラエル人の全会衆が会見の天幕の入口で泣いていると、彼らの目の前に、ひとりのイスラエル人が、その兄弟たちのところにひとりのミデヤン人の女を連れてやって来た。 25:7 祭司アロンの子エルアザルの子ピネハスはそれを見るや、会衆の中から立ち上がり、手に槍を取り、 25:8 そのイスラエル人のあとを追ってテントの奥の部屋に入り、イスラエル人とその女とをふたりとも、腹を刺し通して殺した。するとイスラエル人への神罰がやんだ。 25:9 この神罰で死んだ者は、二万四千人であった。

慎重な調査の結果、神に命じられて祭壇を築いたわけではないが、誠実な気持ちで良かれと思ってしたことであることがわかりました。

彼らは、いけにえをささげるために祭壇を築いたのではありませんでした。子孫のために、彼らがイスラエルの民に属している証として築いたのです。いけにえをささげる場所ではなく、記念碑だったわけです。

この説明に、ピネハスも代表団も納得しました。内戦は回避され、部族間の交わりは回復しました。

むずかしい状況でしたが、無事一件落着きました。

この危険な誤解から、私たちは何を学べるでしょう。

キリスト教会の中でも、誤解は日常的に生じます。

それが原因で教会が分裂したり、働きが台無しになったりします。真実が明らかにならない場合もあり、無実の人が傷つけられ、生活を壊されることもあります。

OIC でそのような誤解を防ぐために、私たちに何ができるでしょう。

答えはいつもみことばの中にあります。では、この状況から何を学べるか見てみましょう。

コミュニケーション — 二部族と半部族の人々が、祭壇を築く計画とその必要性について他の部族の人たちに前もって説明していたなら、このような衝突自体、避けられたでしょう。もっと冷静に話ぐできたはずで

誤解を防ぐ方法のひとつめは、自分の決断によって何らかの影響を受ける人に十分話をすることです。

書面にするのはよい方法です。私たちは言ったことを忘れてしまいがちですし、書面にすることで、変更が必要な部分もわかってきます。

次に、又聞きの情報を真に受けてはならないということです。重要な内容なら、なおさらです。

又聞きとは、誰かが何かについて言うとき、直接その状況について知っているわけではない状態を指します。他の誰かから聞いた情報です。11節で、この「又聞き」が登場します。彼らは、「伝え聞いた」のです。この話を伝え始めた人も、ただの憶測であり、祭壇について直接彼らに尋ねたわけではありません。

うわさを言い始めるのはとても悪いことですが、それを広めるのも同様に悪いことです。

次に、誰かの過ちに対する疑惑は、恵みをもって慎重に見極める必要があります。

もしピネハスと代表団が状況を念入りに調べず、又聞きの情報に従って軍に攻め入らせてしまったら、内戦になっていたことでしょう。

しかし、彼らは信望の厚い適任者を遣わし、状況をしっかり調査しました。

何か誤解が生じてしまったら、適任者を介して和解を試みるのがよいでしょう。

そうでないと、問題が悪化する恐れがあります。

大阪インターナショナルチャーチには、あらゆる国や文化の背景を持つ人々が集まっています。うわさや又聞きの情報を受れたり広めたりしないことで、教会を守りましょう。誰かと何らかの問題が起こったら、聖書の原則に従って、直接本人と話をし解決するように努めなければなりません。

マタイ 18 : 15-18

**18:15** また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。 **18:16** もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。 **18:17** それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。 **18:18** まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれているのです。

祈りましょう。